

『哲学探究』における「心理的雰囲気」
——ウィトゲンシュタインの「心理（学）」概念の系譜的観点から——

菅崎 香乃(SUGASAKI Yoshino)

筑波大学大学院

本発表では、『哲学探究』で展開された「心理的雰囲気 (psychologische Atmosphäre, psychological atmosphere)」と総称することのできる、ひとつの論点の重要性を指摘したい。これは『哲学探究』作成の後にも引き継がれる主題のひとつであり、この考察を通じて、ウィトゲンシュタインのいわゆる「心理学の哲学」の解明への寄与が期待される。

おおよそ『哲学探究』の後半をはじめとし、その後本格化していく一群の考察が「心理学の哲学」と呼ばれ、またこの時期ウィトゲンシュタイン自身も「心理学のわれわれの探究 (unsrer Untersuchung der Psychologie, our investigation of psychology)」という言い回しを用いている。しかし、一連の考察がいかなる主題の元にあるのか、また、かれがそもそも何に対して「心理（学）(Psychologie, psychology)」という語を用いているのかは判明とは言い難い。本発表では、「心理学の哲学」が本格化する直前の段階と言える『哲学探究』において「心理（学）」およびその関連語（とくに「心理的 (psychologisch, psychological)」）がどのように用いられているのかに注目したい。それによって明らかになるのは、「心理的雰囲気」にまつわる議論が『哲学探究』における「心理（学）」という概念を特徴づけているということである。「心理的雰囲気」と呼ばれるのは、馴染みの言葉を見聞きし、あるいは読む際に生じるように思われる体験のことであり、「意味の陰影」や「ある特定の体験」、あるいは単に「雰囲気」や「感じ」とも言い換えられる。『哲学探究』においては、とくに、哲学者がある種の言い回しを使いたくなるとき、その表現によって言い当てようとするものとして論じられ、ウィトゲンシュタインが抗する哲学的錯覚のひとつと言える。本発表では、『哲学探究』以降の展開も視野に収めつつ、この「心理的雰囲気」がどのような議論なのか、明らかにしたい。